

東京都教育映画コンクール金賞

文 部 省 選 定

16ミリ カラー 31分

ちどり と 子供たち



企画 貯蓄増強中央委員会
製作 (株)桜映画社

■製作スタッフ■

製 作……………村 山 英 治
 村 山 和 雄
脚 本・監 督……堀 内 甲
撮 影……………村 山 和 雄
照 明……………沢 田 実
音 楽……………長 沢 勝 俊
編 集……………沼 崎 梅 子

■出 演■

西島梯四郎 小林 勝 也
青木千里 鳴門の子供たち
協力 鳴門市

■製作意図■

この映画は、チドリの研究観察を始めた科学クラブの子供たちが、巣のある塩田を埋めたてられるという事件を通して、生命の尊さや、それを守ることの困難さを体験していく姿を描いている。私たちがともすれば失いがちな根気よく続けることの大事さ、生き物への愛情、親と子の交流、貯金の活用等を考えることの一助としたい。同時に背景となっている環境汚染の問題や自然保護の重要性についても、子供たちにも考えさせたい。



シロチドリ

■ あらすじ ■

太一は今日も仲の良い近所のじいちゃんと一本釣りの漁に海へ出た。太一の家では、去年ハマチの養殖が赤潮で全滅してしまったために、父親は遠洋漁業の船に乗り、母親はわかめ工場で働いている。漁の帰り道、太一は塩田の跡地でチドリの巣を見つける。

これがきっかけとなって、太一たちの小学校の科学クラブではチドリの観察をすることになった。チドリは警戒心の強い鳥である。その生態を詳しく観察するにはどうしても望遠鏡が必要であった。太一たちは皆で貯金を出し合って望遠鏡を買った。望遠鏡で見るチドリは、ピクンピクン首を振って小さなダチョウのようだった。始めて間近に見るチドリに皆夢中になった。図鑑でそれがシロチドリであることも分った。親チドリは卵をあたため始めた。

ところが塩田跡で埋め立て工事が始まって科学



コチドリ

クラブの子供たちをあわてさせた。彼らは、「この塩田跡にチドリの巣があるので卵がかえるまで埋め立てを待って下さい。」という立て札を作って現場へ駆けつけたが、チドリはブルトナーの音響に驚いてもう帰って来なかった。太一が発見した第1号の巣の卵は冷えてしまった。

この事件のあと、遠くインド洋の方から渡って来るコチドリの巣が発見され、くじけそうになっていた太一たちを再び元気づけた。シロチドリは国内に干潟を求めて移動し越冬するが、コチドリだけは南方へ渡っていく。夏休み中にも連日観察は続けられた。そして

卵が生まれてから24日目の朝に残ったシロチドリの巣でひながかえった。子供たちの感激もひとしおだ。やがてコチドリのひなもかえった。太一はそれを母にも見せずにはいられなかった。このコチドリはやがて南の海へ渡っていく。父親が乗っている船に羽根を休めるかも知れないと思うと太一は胸がいっぱいになった。

環境の変化の中でチドリの住める場所も次第に少なくなっていく。渡りの季節になって群をなして空を飛ぶチドリを眺めながら、子供たちはここで生まれたチドリが来年もここへ帰ってくれることを願い、チドリが生きていけるような自然を残して欲しいと思う。それは再び漁のできるきれいな海をとりもどすことでもあった。

■ 映画評論家 大内秀邦氏評

ちどりはからだ小さくて動きがす早い。それをカメラにとらえることは容易でなかったであろう。それだけに、この映画に見るちどりの生態は珍しいし、興味が深い。そのちどりと子供たちとの交渉を通して、はげしい時の流れにもかかわらず、微かな自然の営みがつづけられていることを知るとき、改めて生命尊重の意義が痛感される。

■ 世田谷区立用賀小学校長 中山周平氏評

変貌はげしい人間社会と、環境の移り変りは、小さな生きもののチドリに、大きな害を与えています。チドリの観察を通じて、自然を愛情豊かに、根気よく見守っていくとする学童と、それをとりまく家族の心温まる生活を描いた詩情溢れる画面の多いこの映画は豊かな人間性を育てる上で、大きな役割を果たすことを信じ、広く推薦します。

頒布価格 ￥ 165,000